楽園から来た人

ウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
楽園から来た人

【Ｎコード】
Ｎ３５０１Ｔ

【作者名】
ウル

【あらすじ】
私は彼女に、嘘をついたのだろうか。企画提出作品。
※この作品はＥ★エブリスタ他、いくつかのサイトに重複投稿しています。

「らくえんからきたのね」
道端の影がそう囁いたとき、何かを見抜かれたような気がして、私の背すじは予期せず震えた。木の葉のさざめくようなあえかな発音のなかで、“らくえん”という言葉だけがやけにはっきりしていた。
私は足を止めて、声の主を顧みた。
青い目をした少女だった。眉月（まゆづき）の下、ぼんやりと浮かぶ肌は色褪せて白く、髪は古い紙のように乾いて見えたけれど、その両目だけはまださやかに私を見る。ひと目で、そうとわかった。
私たちはしばしの間、見あっていた。少女がもたれかかっているのは老いた桜らしく、仰げばぽつぽつと白いはながほころんでいる。
「ねえ」少女はそう言って、私を自分の隣に招いた。「すわったら」
毛羽立った毛布に腰を下ろす。街路を渡る風は花冷えの感を見せはじめていたが、外套の襟を立てた私には関わりのないことだった。もちろん、隣に座る少女にも。
どうして、そう思う。雲にかげる月を見て尋ねると、答えの代わりに帽子を奪いとられる。
「にあうかしら」
おぼろな陰影のなか、少女が首を傾げるのがわかった。

一拍のあと、彼女は激しく咳き込みはじめた。ご、ご、と胸に絡むようなそれは、帽子から落ちた砂塵を吸い込んだからだけではあるまい。
とっさにその背に触れてしまった私は、すぐに自分の軽率さを悔いた。氷ではなく、障子紙のようにつめたい体。これだけにはいつも、慣れることができないのに。
淡い絹に包まれた肩は肉の落ちて頼りなく、咳をするたび大きく

跳ねる。私は少女の背に当てた手を剥がすことができなくなった。
「わたし、ひかりをみたわ」
やがて咳が止まると、少女は遠くを見やる。
「ひかり？」問い返しても、「ひがしのそらをね、ひかりがそめていたの」とどこか上の空に続けるばかり。「しっているのよ。あなたが、ひがしからきたこと」
そうなのでしょう、あなたは。――らくえんからきたのでしょう。
二度目の台詞を言うと、少女は白い歯を覗かせる。こちらを見つめる青い目は溺れそうなほど透き通っていて、私はたまらず視線を落とした。石畳の隙間に、黄色い花がぽつりと咲いていた。
「……ちがう。私は」
ようやく答えた声は大きなものにはならなかった。
届くのを恐れるように、認めるのを恐れるようにそっと。私は自分がひどくおびえていることに気づいていた。逸らしたはずの目は、また少女のそばへ吸い込まれている。耳鳴りがする。
「そうかしら」
ふふと、見透かしたような横顔に、私は遥か昨日を幻視する。
あっという間のことだった。父の死に泣く前に母が死に、友の死に泣く前に恋人が死んだ。街ゆく人びとはみな、少女と同じ病に倒れた。そうして世界は確実に亡(ほろ)びていったのに、どうしてか私だけは死ねなかった。
この世界に、苦しみ悶える声はない。代わりに生よりも甘美で穏やかな死――そしてそこより拒絶された孤独のみがある。
『真の絶望とは、希望に届かぬことを云う』
どこかの詩人の言葉の向こうに、私は私の地獄を見たのだ。

「つきがきれい」
唐突に腕をつかまれ、私は木陰から引き出された。天に伸びた指の先を辿り、息を飲む。
月が満ちていた。

雲は払われ、先ほどまで今にも消え入りそうだった光は、夜の中心に浮かぶ飴色の明月と変わっていた。
すべての生者が息を止めた沈黙のなかで、私は少女の横顔を盗み見る。
ただ、美しいと思った。草臥(くたび)れた帽子の下で月に照らされた肌はすべらかで、どこか作りものめいてすら見える白。夜風に黒い髪がなびき、そこへ白いはなびらが無数交わる、ああそういえば、あれは桜の木だったか。
立ち尽くす青の双眸(そうぼう)から、月光がひとひら、零れて落ちた。
「わたしは“らくえん”に、ゆけるかしら」
「行けるさ、必ず」
「ちかって？」
「ああ、誓って。約束する」
私が肯くと、くすぐったそうに笑って、よかった、と泣いた。抱きしめた腕のなかで、いつまででも、つめたい体を震わせていそうだった。
人びとが夢から醒めるすこし前、少女は眠りについた。私には彼女の最後に口にした言葉を、聞きとることができなかったのだけれど、それでも、それでよかったのだと思った。
最後まで、嘘のように青い目をした少女だった。
私は暁光(ぎょうこう)に滲む景色のなかで彼女をはなのない桜の下へ横たえると、

ドン。

銃を抜いてその額を撃った。
枯れ枝みたいに細い体は衝撃でほんのわずか跳ねた。大口径のマグナムはおそらく一撃で、彼女の柔らかい頭蓋を貫き、『ふたたび』死に至らしめたことだろう。
立ち上がり視線をめぐらすと、夢遊病者のような影がいくつか、

通りを渡ってくるのが見えた。
「早起きでよろしいことだ」
皮肉を口ずさんでから、私は銃を構えた。幸いなことに弾ならばいくらでもあるし、歩く死体たちはなにか幸せな夢でも見ているようにのろのろ歩く。的にするに難しいことはなにもない。
「らくえん」
銃の反動に痺れる腕を抱えながら、口に出してみる。死体たちは、とても、とても幸せそうに見えたのだ。
――私は彼女に、嘘をついたのだろうか。

街外れからふり返ると、黎明(れいめい)の空が炎の色に染まっていた。
ひかり、か。自嘲するように笑んでみても、硝煙と血の匂い、建物の焼ける匂いとが鼻腔(びこう)に溢れて、私の頬はなぜだか濡れた。
「帽子、忘れてたな」
たしかに、そう、きっと私は、楽園から来た。楽園に背を向けて、ここへ。

（後書き）

今作はさる企画用に書いたものです。三千文字以内、「一夜の夢」というテーマでした。

非常に短いお話ですが、長い期間をかけて書いたため、普段と語彙の選択を変えるなど、ちょこざいなこともしております。文章面では気に入っている一作です。

読んでくださったみなさまの心に、わずかでも何かを届けられたら。それが私の喜びです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3501t/

楽園から来た人

2011年6月22日03時40分発行